様式Ｆ－１９

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成 25 年　5 月 22 日現在

機関番号：11101
研究種目：若手研究（B）
研究期間：2011 年度～2012 年度
課題番号：23730658
研究課題名（和文）　身体醜形懸念の生涯発達的理解に向けた世代間横断研究
研究課題名（英文）Cross-sectional study of body dysmorphic concern across the life-span.

研究代表者
田中　勝則　（TANAKA MASANORI）
弘前大学・教育学部・講師
研究者番号：10510969

研究成果の概要（和文）：
容姿についての欠点への過剰な心配や強いとらわれ、過度の確認行動や容姿についての欠点をカムフラージュしようとする行動、社会的な場面からの回避や安全を求める行動は身体醜形懸念と定義される。本研究では生涯発達的な視点から身体醜形懸念についての検討を行った。その結果、次の知見が得られた。(1) 身体醜形懸念は全ての年代において共通した因子構造を有している、(2) 強い身体醜形懸念の対象となる身体部位は年齢や性別で異なる、(3) 青年期群を対象とした身体醜形懸念の認知行動モデルの様々な世代への適用に関しては、検討の余地が残されている。

研究成果の概要（英文）：
Body dysmorphic concern was defined as an intense concern and a preoccupation with their perceived appearance flaws, excessive checking and camouflaging of them, and social avoidance and reassurance seeking. The aim of this study was to investigate developmental changes of body dysmorphic concern across the life-span. The results revealed that as follows: (1) factor structure of body dysmorphic concern was common in all ages, (2) there were some differences between ages and sexes about body parts with high dysmorphic concern, (3) applications of cognitive-behavioral model of body dysmorphic concern for adolescence to various generations left room for consideration.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
交付決定額	1,400,000	420,000	1,820,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：心理学・臨床心理学
キーワード：身体醜形懸念、身体醜形障害、醜形恐怖、生涯発達的理解、認知行動モデル

１．研究開始当初の背景

従来、醜形恐怖として扱われてきた概念について、Littleton et al (2005) は“容姿についての欠陥への過剰な心配や強いとらわれ、過度の確認行動や容姿についての欠陥をカムフラージュするための行動、社会的な場面からの回避や安全を求める行動”である身体醜形懸念として再定義を行っている。アメリカ精神医学会による精神疾患の診断基準では身体醜形障害という基準が存在するが、身体醜形懸念は身体醜形障害の臨床群における特徴的な症状と考えられてきた。青年期は身体醜形障害の好発期と言われており、これまでの研究でも青年期の健常者において身体醜形懸念が高まることが報告されている。

こうした知見を基に、これまでの身体醜形懸念の研究は主として青年期に該当する大学生を対象に行われることが多かった。研究代表者もこれまでに大学生を対象とした研

究から、身体醜形懸念が「容姿の問題に対する安全確保行動」、「容姿の問題からの回避行動」、「容姿への否定的評価」の 3 因子から構成されることを明らかにしてきた。また、身体醜形懸念の対象となる身体部位、および身体醜形懸念の認知行動モデルについて検証を重ねてきた。

しかし、こうした大学生を対象として得られた知見が青年期以外の発達段階における者に対しても有効であるかについては明らかではなかった。海外での先行研究では青年期以外の発達段階も対象とした研究が行われている。そこでの報告は身体醜形懸念が 2 因子で構成されているというものであり、我が国で大学生のみを対象として行われた研究とは異なる知見である。

近年、加齢に伴う容姿の衰えをカバーすることを目的とした美容整形の受診率が増加傾向にある。その中に強い身体醜形懸念を訴える一群が存在することも指摘されている。こうした問題を踏まえれば、我が国においても海外での先行研究と同様に、青年期以外の発達段階を対象とした身体醜形懸念の研究を展開し、基礎的知見を積み重ねていく必要がある。

２．研究の目的

以上の背景を踏まえ、本研究ではこれまで研究代表者が先行研究で明らかにしてきた次の 3 点について、生涯発達的な視点から再検討を加えることを目的とした。

(1)　大学生を対象に得られた身体醜形懸念の 3 因子構造（「容姿の問題に対する安全確保行動」、「容姿の問題からの回避行動」、「容姿への否定的評価」）が異なる発達段階においても再現されるかについて検討する。

(2)　青年期以降の発達段階において身体醜形懸念の対象となる身体部位や身体的特徴について、探索的に検討を行う。

(3)　大学生を対象に確認されている身体醜形懸念の認知行動モデル（図 1）について、様々な世代においても適用が可能かについて検討を行う。

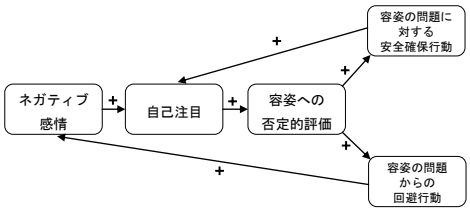

図 1　身体醜形懸念の認知行動モデル
（図中の+は正の影響を示す）

３．研究の方法

【調査対象と調査方法】

本研究ではインターネット調査会社を通じ、web による全国調査を実施した。調査対象は同社に登録されているリサーチ専用モニタ約 106 万名（調査時点）であり、インターネット画面上で調査の趣旨に同意した 20 代から 60 代までの男女 2060 名が調査に参加した。調査協力者の平均年齢は男女ともに 44 歳（*SD*=14）だった。

なお、調査協力者の男女比および各年代における人数が等しくなることを目的とした統制を行った。加えて、調査時には同一回答者が複数回解答することがないよう、web 上で回答制限を設定した。また、同一傾向の回答がなされた場合には、次の回答ページへ進むことが不可能となるよう設定を行った。以上のような手続きを経ることで、データの良質化に努めた。

全ての調査項目に回答した調査協力者には、調査会社を通じて 100 円相当のポイントが謝礼として付与された。

【調査項目】

本研究ではインターネットの画面上で、デモグラフィック項目（年齢、身長、体重）に加え、次の調査票への回答を求めた。

(1)　日本語版 Body Image Concern Inventory（田中ら、2011）
身体醜形懸念の測定に用いた。全 19 項目であり、「容姿の問題に対する安全確保行動」、「容姿の問題からの回避行動」「容姿への否定的評価」の 3 因子で構成されている。5 件法で回答を求めた。

(2)　身体醜形懸念の対象となる身体部位や身体的特徴 46 項目について、気がかりであるか否かを 2 件法で尋ねた。

(3)　自意識尺度（菅原、1984）
自意識尺度のうち、外見への自己注目を反映していると考えられる公的自意識尺度（全 11 項目）への回答を 7 件法で求めた。

(4)　外見に対する否定的感情測定尺度（安保・根建、2011）
身体醜形懸念は体重や体型にのみ限定されないことから、外見全般に対するネガティブ感情を測定することが可能である本尺度を用いた。全 13 項目で構成されており、本研究では 5 件法で回答を求めた。具体的な項目例としては“憂うつ”、“みじめ”、“つらい”などがあげられる。

【分析方法】

身体醜形懸念の 3 因子構造が異なる発達段階間でも再現されるかを検討するために、多母集団同時分析による確証的因子分析を行

った。
身体醜形懸念の対象となる身体部位や身体的特徴については、クロス集計を行った。
身体醜形懸念の認知行動モデルの検討に際しては、図1のモデルについて多母集団同時分析によるパス解析を実施し、同モデルの様々な世代への適用についての可能性を検討した。

４．研究成果

(1)　身体醜形懸念の因子構造の発達段階間比較検討

分析の結果、海外の先行研究で報告されていた身体醜形懸念の2因子モデルよりも、これまでの大学生を対象とした研究で研究代表者が報告してきた 3 因子モデルにおいて、十分な適合度が得られた。また、この3因子モデルは発達段階に関わらず不変であることが示された。更に、得られた3因子について信頼性係数を算出したところ、十分な値が得られた。以上の結果より、大学生を対象に得られた身体醜形懸念の3因子モデルは発達段階に関わらず適応可能な構成概念と考えられる。
また、このことより、身体醜形懸念が高まる青年期のみならず、質的に同様の症状が生涯発達的に生じる可能性のあることが示唆される。そこで、身体醜形懸念の得点を 20 代、30代、40代、50代、60代間で比較したところ、男女とも20代から30代までは大きな変化が見られないものの、40代以降は男女ともに加齢に伴い低下していくことが明らかとなった。身体醜形懸念は青年期に高まることが従来指摘されていたが、比較的年齢の高い 30 代までもその症状が維持されることが明らかとなったことは本研究における新しい発見の一つである。今後、身体醜形懸念について検討する際には、青年期という時期をロングスパンで考える必要のあることが示唆される。

(2)　身体醜形懸念と関連する身体部位や身体的特徴についての発達段階間比較検討

分析の結果、薄毛（髪の毛）、顔のシミ、額、性器の4つの身体部位および身体的特徴に関して有意差が認められた。
最も薄毛が気がかりと答えた群は 50 代の男性群であった（気がかりと答えた者のうち 15.1%）。最も薄毛が気がかりではないと答えた群は 30 代の女性群であった（気がかりと答えた者のうち 4.0%）。最も顔のシミが気がかりと答えた群は40代の女性群であった(気がかりと答えた者のうち17.3%)。最も顔のシミが気がかりではないと答えた群は 20 代の男性（気がかりと答えた者のうち3.9%）であった。最も額が気がかりだと答えた群は 50 代の女性であった（気がかりと答えた者のうち 15.6%)。最も額が気がかりではないと答えた群は 50 代の男性であった（気がかりと答えた者のうち 4.5%)。最も性器が気がかりだと答えた群は 20 代の女性であった（気がかりと答えた者のうち15.7%)。一方、最も性器が気がかりでないと答えた群は 60 代女性であった（気がかりと答えた者のうち2.2%)。
結果の（1）からは身体醜形懸念の症状が発達段階間で質的に同様のものである可能性があることが示唆されたが、以上の結果からは、年齢や性別に応じて身体醜形懸念の対象となる身体部位や身体的特徴については差異のあることが窺われる。身体醜形懸念で訴えられる身体部位や身体的特徴への不満足感については、年代や性差を考慮して対応することが必要であることが示唆される。

(3)　身体醜形懸念の認知行動モデルの発達段階間比較検討

分析の結果、大学生を対象に得られていた身体醜形懸念の認知行動モデルは全調査協力者を対象とした際にも、また、発達段階別に分析を行った際にも十分といえる適合度を示さなかった。
青年期群において大学生を対象とした先行研究と同様の結果が得られなかった要因としては、今回の調査における青年期群が大学生のみにとどまらなかったことに起因している可能性がある。また、先行研究ではネガティブ感情の測定に際し、今回用いた外見全般に特化したネガティブ感情を測定せず、一般的な場面で感じられることの多いネガティブ感情について測定する尺度項目を用いている。こうした方法論上の差異が今回の結果を生じさせている可能性があるため、今後、調査条件を統制し、更なる検討を行う必要があると考えられる。
一方、中年期（40代）以降の年代において先行研究が再現されなかった理由としては、以下のようなことが考えられる。身体醜形懸念が外見に関連する問題であることから、本研究では外見への注意に相当する公的自意識を自己注目としてとりあげた。一方、中年期以降は一般に外見の衰えのみならず、諸々の身体機能も徐々に低下していく時期である。したがって、青年期の調査協力者と比べ、中年期以降の調査協力者では注意の焦点が外見ではなく、低下していく身体機能にフォーカスしていた可能性があり、その結果、大学生を対象として得られていた先行研究のモデルを支持しなかった可能性がある。今後はこうした可能性についても検討を重ねていき、中年期以降にも適用可能な身体醜形懸念のモデル構築を進めていく必要があろう。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）
(1)　田中勝則、田山淳、有村達之　大学生における身体醜形懸念とアレキシサイミアの関連、心身医学、53、334-342、2013、査読有
(2)　田中勝則　大学生における身体不満足感と身体醜形懸念　弘前大学教育学部紀要、108、131-139、2012、査読無
(3)　田中勝則、有村達之、田山淳　日本語版 Body Image Concern Inventory の作成、心身医学、51、162-169、2011、査読有
(4)　田中勝則、田山淳　大学生における身体醜形懸念と完全主義認知の関連、認知療法研究、4、140-148、2011、査読有

〔学会発表〕（計５件）
(1)　田中勝則、田山淳　ボディイメージや食行動異常に影響する社会文化的要因-性差と年代差に着目して-、第 19 回日本行動医学会学術総会抄録集、98、東京（東邦大学）、2013.
(2)　Masanori Tanaka, Jun Tayama, Tatsuyuki Arimura. Developmental changes of body dysmorphic concern in Japanese population: A cross-sectional web-based survey. The 12th International Congress of Behavioral Medicine, Budapest, Hungary, 2012.
(3)　田中勝則　日本語版 Body Image Concern Inventory の因子構造の生涯発達的検討、日本心理学会第 76 回大会発表論文集、442、神奈川（専修大学）、2012.
(4)　Masanori Tanaka, Jun Tayama, Tatsuyuki Arimura. Body parts dissatisfaction and body dysmorphic concern among Japanese undergraduate students. The 21st World Congress of Psychosomatic Medicine, Seoul, Korea, 2011.
(5)　田中勝則　身体醜形懸念と性格５因子モデルの関連、日本心理学会第 75 回大会発表論文集、386、東京（日本大学）、2011.

〔その他〕
ホームページ等
ReaD&Researchmap
http://researchmap.jp/tnk/

６．研究組織
(1)研究代表者
田中　勝則（TANAKA MASANORI）
弘前大学・教育学部・講師
研究者番号：10510969

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし